

学術大会開催報告

第14回学術大会開催報告

2012年10月24日～25日
於曹洞宗檀信徒会館3,4階

第14回学術大会を、2012年10月24日～25日の日程で、曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）にて開催いたしました。大会は3会場にて行われ、65名の個人発表の他、プロジェクトによる報告やパネル発表も3件企画されました。連日、多くの聴講者があり、盛会裡に閉幕しました。

大会初日午前9時30分より「桜の間」にて開会式が挙行されました。本尊上供、宗歌斉唱に引き続き、佐々木孝一宗務総長並びに池田魯参総合研究センター所長が挨拶をしました。

午前10時から3会場にわかれての個人発表が行われました。また、並行するかたちで、プロジェクトによる報告やパネル発表もありました。

まず、初日の午前10時から、「桜の間」において「布教・教化実践モデル開発研究プロジェクト」による活動報告がありました。このプロジェクトは現代社会のニーズに即応し得る実践的な布教教化手法を開発することを目的として2012年より様々な活動を展開しております。その中で、今回の報告では、①檀信徒会館を会場とした会社員向けの早朝坐禅会「朝活禅」②東日本大震災において被災された方がたに対する傾聴活動③自死遺族の方がたを対象とした供養法要「祈りの集いー自死者供養の会ー」について活動の現状や今後の展開の見通しなどについての報告がありました。

「朝活禅」の発表では、約3カ月の間に6回を一つのクールとして行われ、30代～40代を中心として毎回定員30人を超える申し込みを頂いていることが報告されました。さらに、『東京ウ



佐々木孝一 宗務総長



池田魯参 総合研究センター所長

オーカー』（角川書店）や『グラディート』（サンケイリビング社）といった雑誌やフリーペーパーとの共同企画として「朝活禅」をベースとしたイベントを開催した経緯や可能性についても触れられました。また、東北管区教化センターにおいて「仙台朝活禅」が開催されたことを同センター東海泰典主幹に発表していただきました。

震災における被災者の傾聴活動については、ビーズ・ブレスレット作りを通じて、被災された方がたのところに寄り添う活動を東北三県（岩手、宮城、福島）において行っており、今後も継続的に訪問する予定であることが報告されました。この活動では宗侶のみならず寺族や他教団の僧侶、あるいは一般のボランティアとも相互に連携しながら行っていますが、今後も複合的な協力関係を築きながら支援に当たっていく必要性が確認されました。

「祈りの集い」の発表では、年間2回の定期開催を継続して行っていることが報告されました。身近な方を自死（自殺）で亡くされた方がたに対する支援の必要性は社会のあちこちで指摘されますが、僧侶という立場においては、「供養」こそがその有効な方法に成り得ることが報告され、同時に、遺族の方がたのところに寄り添うことができるよう、僧侶自身も接し方や心構えなどについて学ぶ必要があるという指摘がなされました。

初日の午後1時から「芙蓉の間」において「北関東における近世洞門学僧の研究」と題するパネル発表があり4名が発表しました。

北関東地域では、江戸時代の初期から中期にかけて多くの学僧が活躍し、大陸から入ってくる新たな文物の流入の中で教学の刷新が図られていたとされます。さらには江戸の三学林などで学ぶ学僧との人的交流など、興味深い点が多いと言えます。

その一方で、従来の近世仏教の研究においては、こうした新旧の宗学がせめぎ合う状況は扱われることが少なかったことが発表で指摘され、その意



布教教化に関して意見を交わす



パネル発表「北関東における近世洞門学僧の研究」



多くの聴講者が耳を傾ける

味で、今後も継続的に研究することで江戸宗学研究の発展に寄与したい、としています。

特定のテーマを設定し、それに関わる研究者が

学術大会開催報告

様ざまな知見を持ち寄り検討することは非常に意義があることであり、このようなパネル発表が積極的に企画されることが期待されます。

また、2日目の午後1時40分から、「桜の間」において、こころの問題研究プロジェクトによるパネル発表がありました。平成23・24年度の現職・尼僧研修会、及び平成24・25年度の寺族研修会では全国統一テーマを「人びとのこころに向き合うために」とし、プロジェクト員が全国各地の講習に赴き、菩薩行という立場からこころに苦悩を抱える多くの人びと、一人ひとりに寄り添うための、知識や方法を手紙相談や面接相談などのロールプレイなどを通しての研修を行ってきています。このパネル発表は、実際に研修を担当した際に、現場で感じた感触や、頂いた意見などをフィードバックさせることを目的として開催されたものです。発表では、①何故今こころの問題なのか、②『人びとのこころに向き合うために』を通して学んだことを実際に生かすことができたか、③今後このプロジェクトは何を取り組んでいくべきなのかという視点から、プロジェクト員7人が会場の聴講者を含めて意見交換しました。

(詳細は『曹洞宗報』2013年6月号に掲載)

2日間にわたって行われた個人発表は65名が発表しました。従来の宗学や教化に関連する分野はもちろんのこと、環境問題、葬祭問題や經典のデジタル化、寺院のウェブサイトについてなど、現代社会のニーズを反映した発表、宗門の未来予想研究に関する提言、坐禅会の運営や初心者への坐禅指導法の提案、海外における宗教者の活動についての報告など、幅広い視点からの意欲的な発表がされました。今後も宗教が社会に求められるニーズに対応できる思想的研究に基づく発表や布



パネル発表「人びとのこころに向き合うために」



活気溢れる意見交換が随所で見られた

教教化に関する実践報告が多くなされることが望まれます。

それぞれの発表においては発表者と聴講者が活発な議論を交わす場面も様ざまな会場で見られ、学問研究や教化法の発展という点で充実した大会になったと言えます。

総合研究センターでは今後も宗門内外の多くの皆さんの発表・聴講をお待ちしております。なお、発表内容は、後日、総合センター学術大会紀要として刊行されます。